空路終末旅行

月島　星

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

チトとユーリが飛行機に乗って廃墟をさまようだけのお話。▼チトとユーリを飛行機に乗せたかっただけ。反省はしていない。▼不定期更新、乱文、誤字脱字、設定矛盾、その他諸々注意。

目次

プロローグ
過去 …… 1
本編
着陸 …… 8
給油 …… 13
飛行 …… 21
市場 …… 30
価値 …… 40
音頭 …… 50
霧雲 …… 60
再生 …… 70
投下（前編） …… 81
投下（後編） …… 92
隔壁 …… 104
番外編
解説 …… 117

プロローグ
過去

「暇だねちーちゃん。」
「お前は何もしてないからな。」

チトトユーリの二人は古めかしい複葉機〝ソードフィッシュ〟に乗って、この階層都市の最上階層を目指していた。

「暇なら下でも見ててくれよ。」
「はーい。」
『ヌイ？』

ラジオから音がする。ユーリが動いたためヌコが起きた。先ほど二人といったが、正

確には二人と一匹?だ。ユーリが中央の席。といっても椅子も外してただの物置として使っている所からスコープを出す。

「なんもないねー。」

「ホントか?」

そういわれたユーリはもう一回スコープを覗く。

「あ、右にでっかい道があるよ。」

「ほらやっぱり。」

沢山の建物の奥に広く空いた一本の筋がチトにも見えた。チトは機体をバンクさせ右へ向かう。その場所の上にはすぐ着いた。

「結構大きい道だな。」

「降りる?」

「いやこのまま上を飛ぼう。」

機体はその道をまっすぐに飛んで行った。

＊

しばらくすると、後ろが静かになった。

「あいつまた寝てるな…」

『ヌイ？』

離陸して随分立つので無理もないと思ったチトは起こさなかった。それよりも、自分の眠気のほうが気になった。

「これはどこかで休むか。幸い、着陸できる場所はいくらでもあるし。」

チトは機体を静かに着陸させる。後ろの席から毛布を取り、ユーリにかぶせる。自分は予備の服をかぶって眠りについた。

＊

『二人はソードフィッシュに乗って逃げなさい。』

昔見たっきりのおじいさんはそういった。エンジンをかけるために取っ手を回していた。

『軽い二人ならこの風でも飛び立てる。』

エンジンがかかって爆音が鳴り響く。遠くでは機関銃や大砲の音がけたたましく、そして絶え間なくなり続けていた。

『でも…』

『いいから行きなさい。』

弱い向かい風を受け、増槽と食料をたくさん積んだソードフィッシュは弱弱しく飛び

立った。

『ばいばーい』

ユーリは不安そうにしながらも、笑っておじいさんに手を振っていた。後ろの景色が黒く霞む。

＊

「ちーちゃん？ちーちゃん？」

「うん？」

チトが再び目を開けると、そこにはいつものユーリが立っていた。

「あれ？夢？」

「そういえばなんか言ってたね。」

「でもなんで起こすの？まだ眠い…」

「そりゃ、さっきまで飛んでたのに着陸してたら驚くでしょ。」
「いや、いきなり寝たのはお前の方だぞ。」
「あれ？そうだっけ。」

二人とも目が覚めたので、もう少し先まで飛んでみることにした。エンジンのオイルを全体に回してやるために、二人でプロペラを回す。

「そういえばさっき何の夢見てたの？」
「おじいさんと別れる時の夢。」
「それわたしもよく見る。おじいさん元気にしてるかな…」
「どうだろうね…」

二人は階層の上にあるはずの遠くの空を見つめる。

「さて、エンジンをかけるか。ユーリ回して。」
「おーもーいー。」
「そういえばこいつ、ソードフィッシュって名前だったのか。忘れてたな。」

「お！かかった！」

エンジンから爆音が鳴り響く。しばらくして飛行機は飛び立っていった。

続く

本編
着陸

「もがもが、もがもが…」
「おい、ユー起きろ。」
「あれ、魚…？」
「やっと起きたか、あと板金しゃぶるのやめろ。」

ユーリは目を覚ました、がまだ目を開けられる気分ではない。とりあえず咥えていた板金をポケットにしまう。体は起きたものの頭がまだ追いついておらず、小刻みな揺れが彼女をまた眠りに追いやろうとする。

（でっかい魚食べてたけどやっぱ夢か―　あれ？）

何かがおかしい…　いくら鈍い彼女も気付いた。その揺れがいつもより心地よいことに。それにこの空間、ずいぶんと狭い。それにこの音…。

「ユーそろそろ降りる所を探すから手伝え。」
「…降りる？　…どこに？」

　彼女は目を開け、外を見る。上の階層がずいぶん近く、また地上の廃墟は下にあった。風切り音が随分とうるさく、彼女がどこにいるのか気付くのに時間はそうかからなかった。彼女達は空中にいたのだ。

「飛んでる…?!　なんで?!」
「お前まだ寝ぼけてるだろ。あと喋るときは伝声管の近くで喋れっていつも…　」

　ユーリが座っていたのは古めかしい複葉機、ソードフィッシュの機銃手席だった。チトは何事もなかったように愚痴を言い続けている。

「ななななな…なんで!?」
「ついにユーの頭が…　　あっ、あそこの道路がよさそうだな。」

ユーリが疑問を解消しようといろいろと聞こうとする。しかし、伝声管から遠いせいかチトはいつもの戯言かなんかだと思い、機体を着陸の体勢に移す。

「そもそも、ちーちゃんって高いところ平気だっけ?!　いやそれ以前にいろいろおかしい気が…、うーんうーん…　」

「喋ってると舌噛むぞー。」

ユーリはいつもの数倍考えるが頭が追い付かない。その間、ゆっくり高度を落としてゆくソードフィッシュ。無駄に大きい道路を滑走路代わりに着陸する。不整地用のそりが時たま地面とあたり大きな金属音を出したが、機体は安定したまま動きを止めた。

「…」

「ユー下りないのか?」

「あ、待ってちーちゃん!」

二人は手際よく機体のへこみや足掛けを使い、機体から降りた。

（あれ…なんで私も降り方知ってんだろ？）

「落ち着いたかユー、なんかわけわかんないこと言ってたけど。」

「うーん？」

「ま、おかしなこと言ってるのはいつものことか。」

「なんだとー！」

「だってほんとのことじゃん。」

「ちーちゃんこそ…　」

二人は口喧嘩をしながら荷物を下ろし始める。重い飲料水のタンクを下ろすため二人で力を合わせる。

（あれ、何か大事なことに気づいた気がしたんだけど。）

ふと、ユーリの手が止まる。それに気づいたチトも手を止めた。

「どうしたの、まだ寝ぼけてんの？」

「いやなんか、考え事してた気がしたんだけど…」
「だけど…？」
「忘れちゃった。」
「やっぱいつものユーだな。」
（まあ、ちーちゃんがいれば別にいっか。）
そんなことを考えながら、また荷物を下ろす。いつものように、
続く

給油

「重い…」
「レーション一つ多く食った罰だ。でもやっぱり重いな…」

二人は上空から探し出した一つの給油施設から燃料をソードフィッシュまで運んでいた。燃料が満タンのジェリカンをユーリが一つ多く持って並んで歩く。

「なんでこの給油所にはリヤカーとかホースとか無いんだ…」
「ドラム缶とジェリカンならあったんだけどね～」

愛機のもとに着き、給油を始める。ジェリカンなのでポンプを使わずに漏斗を使い、給油口へ直接注ぐ。作業をしながらユーリが話す。

「ちーちゃん、やっぱこれ給油所まで動かせないのー？」
「広い道ならまだしも道狭かったでしょ？」

「翼たたんで引っ張れば…」
「いや、いくら合成樹脂製で軽いとはいえさすがに二人じゃきついだろ。給油したらさらに重くなるし。」
「ちーちゃんのけち。」
「あ〝？」

　やっと持ってきたすべてのジェリカンから燃料を移し切り、また給油施設へ戻る。また二人はグダグダ言いながら移動していたが、ふと、ユーリの目がドラム缶へとまる。

「そーだチーちゃん！すごいこと思いついたかも！」
「なんか嫌な予感するけど…　一応聞いていい？」
「ふっふーん」

　鼻息を鳴らしながら、近くに転がっていたドラム缶を転がし始める。狭い道だが平坦な道のおかげで抵抗なくドラム缶は転がる。

「これに燃料入れては転がせばいいんだよ！」

「ユーにしては頭いいな、危なくないか？」
「ヘーキヘーキ！やってみよー！」
「楽したいだけだろ。」

半信半疑のチトとノリノリのユーリがドラム缶へ燃料を入れ、蓋をしっかりと閉め、転がす。さすがに縦の状態から横にするのは難しいと考え、横のまま燃料を入れたため半分強しか入らなかったが、ジェリカンの数倍多く、楽に運べた。そのおかげで数回の往復で機体と増槽を満タンにすることができた。

「案外うまくいったな。」
「やっぱ私って天才？」
「それはないな。」
「そんなー…　ってあれ？」

先ほどまで近くにあたあったドラム缶がない。二人が驚いて周りを見渡す。少し先にゆっくりと坂を転がっているドラム缶。しかし着実に加速していた。

「しまった！ここ少し坂だったのか…まあ別にもう使わないしいいか　ってユー!?」
「こらまてーー！」

　しかしユーリがドラム缶に追いつくことなく、坂の下にあったがれきの山にドラム缶が当たり、轟音とともに山が崩落していく。それをボーと見るユーリにチトがやっと追いつく。しかしユーリは何か見つけたみたいに何か見つめている。

「大丈夫かユー!?　残った燃料に引火したら危ないだろ…　ってこれ」
「リアカー？　じゃないよね」
「本で見たことある気がする。たしか…　そうだ『自転車』ってやつだ。」

　二人が見つめる先にあったもの。それは割ときれいな赤い自転車だった。二人はがれきの山から落ちてきたそれを愛機の元まで持ってくる。

「自転車？」
「昔の人はこれで移動していたらしい。」
「バイクみたいにエンジンとかないよ？」

「足でこの板みたいなのを回して乗る…だっけ?」
「わからないならやってみよー!」

おもむろに自転車にまたがるユーリ。悩みながらサドルに座り、ペダルに足をかける。ぎこちない体制のまま、着いた足を離しペダルを回す

「むっむずい。　おっ、こ…　こんな感じかな?」
「おー」

適応力だけは高いユーリが初めてにしては様になった姿勢で自転車をはしらせる。慣れてきたようで右に曲がったり左に曲がったりしながらスピードを上げたりブレーキを掛けたりする。

「私、なんか乗ったことがある気がする?!」
「気のせいじゃない?」
「ちーちゃんもやってよ!」
「えー、私はいいよ。」

「いやできるって！」

強引にユーリに自転車に乗せられる。が、結果はひどいもので、バランスをとれずにすぐに倒れるばかりで何回やっても乗りこなすことはできなかった。

「ちーちゃんへたー」
「難しすぎる…昔の人はほんとにこんなのに乗ってたのか？信じられない…」
「お悩みのところ悪いけど。これって今後の役に立ちそうじゃない？」
「うーんどうだろう。荷物は乗りそうだけど一人しか乗れないし、第一、飛行機に乗らないだろ。」
「あ、そっかあ　でも2人乗りはできそうだよ。」
「なんでわかる。」
「何となく。やってみる？」

しばらく考えるチト。

「やっぱ危ないしやめよう。」

「えー！なんで？」
「ユーの運転は信用できない。」
「ひどい！ていうか乗れなかったちーちゃんに言われたくないしー！」

しばらく二人で口喧嘩をした後、今日はもう暗いので近くの建物の陰で夜を過ごすことにした。ランタンの明かりの元、レーションを食べる。

「なんか、いつもよりおいしい気がする。」
「今日は動いたからな。」
「むしろ足りない。やっぱもう一本。」
「次食べたら、お前だけ自転車な。」
「えー、　いや案外行ける…？」
「無理だろ。」

布団代わりの布をかぶり丸くなる二人。ユーリはつかれたのかすぐに寝てしまった。

（自転車が二つあったら、それで旅できたかもなー　それ以前に乗れなかったけど。）

（あとなんかもっと自分に合った乗り物がある気がする…バイク？じゃなくてこう…なんだ？）

そんなことを考えながら、チトも眠りについた。その夜、二人はチトが乗る自転車にとユーリが二人乗りする夢も見た。チトの方は結構重かったのかうなされていた。

続く

飛行

二人は上空から食べ物や、使えそうなものがありそうな場所を探していた。しかし、あらかた探し終えた場所以外はかなり荒廃した廃墟しかなかった。あきらめたチトがバンクさせていた機体を水平に戻し、ユーリはスコープを下ろす。

「とりあえず来た方の反対側に行こう。」
「そもそも私たちはどこに向かってるんだろう。」
『サイジョーソー』
「あそっか最上層か…　え…？」

首から下げたラジオから音がする。チトでもユーリでもない声がする。ヌコだ。

「…なんでお前がいるの？てかラジオ…」
「いや元からいただろ。」
『モトカライタダロ』

「いや自転車の時とか…」
「一緒に頭に乗ってたぞ…？」
『タノシカッタ』

　そう言われるとそういう気がしてきたユーリは話を戻した。前にもこんなことがあったせいか、前からいたかような気がしてきた。それに先ほど疑問を抱いたのはヌコのことだけではなかった。

「てかさー、最上層まで飛行機で行けばよくね？」
「え。」

　機内が静かになる。

（あれ、なんかまずいこと言ったっけ？）

「そういえば、考えたことなかったな。」

「えっ、じゃあもしかして私天才？」
「それはない。」
「なんでー！」

先ほどから黙っていたヌコは、ユーリの膝の上で寝てしまった。最近は弾、特に『20』が見つからず、おなかがすいているのかもしれない。考え込んでいたチトが話し出す。

「いや。よく考えたら無理な気がしてきた。」
「いや、階層から出てそのまま上がっていけばいいじゃん。」
「いったい上まで何層ある思ってんだ。一層ですら飛行機が飛べるほどでかいのに…あと、上昇は燃料使うし。第一こいつ全然上らないんだよ。ま、その分整備しやすいけど。」

彼女たちが乗ってるソードフィッシュは確かに、終末戦争後に作られた新しいものである。素材は古代の人々の残した高レベルなものである反面、設計はかなり古い。そのうえ速度や上昇の性能も低く、落第点ともいえる。しかしこの機体は整備性や操作性に

かなり優れていたためか、戦争後もかなりの間作られたのであった。
　たとえ上昇性能がもう少し高くても燃料や水、荷物を積んでいるためかなりきついだろうが…。

「ちぇ」
「だからこうして1層ずつ上ってるだろ。給油所を探しながら、」
「まあ、最上層に食べ物があるとも限らないからね～」
「ユーは食べ物に関してはまともな事言うな…」

　二人とも話をやめ、機体が風切り音に包まれる。チトはまた考え出した。今まで思いつかなかったが、最上層まで一発で行く方法がないかどうかを。

「そうだ、階層の端の方に燃料を集めてそこで満タンに補給したら上まで行けるかな…？」
「燃料集めている間に食べ物がなくなりそうだね。」
「うぅ…確かに。」

２回もチトに勝った（？）のでユーリは上機嫌になった。前作った歌を鼻歌で歌いだす。

「屈辱だ…」
「ふっふーん。」
「にしても、やっぱり最上層まで行くのは無理そうだな。よく考えたら階層の端の方って、ほとんど壊れてるか建物があるし。一層ずつ上がった方が一番いい。」
「いままで最上層に行く方法を思いつかったちーちゃんに言われたくない。」
「あ〟？なんか言ったか？」
「なにもー」

そんなことを言い合っているうち、いつの間にか二人は上に階層のない開放部へ出ていた。日は大分傾いてきたようで、雲った合間から日が差し込む。

「大分冷えてきたな。」
「ちーちゃん下見て！雪だよ！」
「考え事してて気づかなかった…なんか眠くなってきたし早く降りる場所を探そう。」
「上に行く？給油所探す？」
「うーん燃料はさっき補給したからいいや。上にはいきたいけど、それより食べ物のほうがヤバいな…」

しかし、食べ物がある場所は探すのは苦労する。ましてやここは雪原。いくら日が当たる場所とはいえ、さすがに建物も少ない。

「なさそうだな…」
『スーパー』
「すぱ？」

急に話し始めたヌコに驚き、ユーリが聞き返す。

「すぱって何？食べ物？」

『タベモノモアルカモ？』
「どこにあるの?!」
『シター』
「下？」

下には四角い雪の盛り上がりがあった。表面は平たんであり高さは人の背丈の倍ほどしかないが、縦と横は飛行機が着陸するのに十分なスペースがあるほど、巨大な建造物があることがあることが分かった。

「あれって建物だったのか…雪に埋もれて気付かなかった。」
「今日のちーちゃんは全然気づかないね。」
「お前も気づいてなかっただろ。」

伝声管でしかツッコめないのを悔やみながら、建物上に着陸を試みるチト。めったにない建物上への着陸であったが雪がかなり積もっているようで、雪原と同じ感覚で着陸ができたようだ。

「不整地用のそり、付けててよかったな…」
「でも、こんな雪じゃあ下の建物に入れないね。」
『ハイレル』
「マジか！どこから。」
『アッチ』

ヌコが指さした先には、サイコロ状の形をした建物があった。そう遠くない場所にあったので、すぐにそこにはついた。近づいてみると結構大きく、飛行機が中に入りそうなほどであった。

「扉はあるけど鍵がかかってるな。」
「壊す？」
『コワソー』

ユーリの教育のせいか、ヌコの言動が荒っぽくなってきたことに呆れつつも、ここは壊すしかなさそうなので壊すことにした。ついていた鍵は簡単な南京錠であり、ユーリの銃で簡単に壊すことができた。この建物自体は古代のものであるが、最近まで使われ

ていたようでその頃付けられたものだろう。食べ物を求めてユーリが先に入る。遅れてチトも入った。

「なんかあるか、ゆー？」
「下へ続く階段があったけど、かなり暗いね。」
「うーん、今日はここで寝て明日下に降りるか。夜も更けてきたことだし。」
「食べ物がー」
「ゆーは食べ物になると頑固だな…」

チトは行きたがるユーリの口にレーションをぶち込みとりあえず満足させ、今日はこの建物で寝ることにした。

続く

市場

「ゆー、起きろー。」
「おはよー、ちーちゃん。」

　窓から外を見ると、日が高く昇っていた。昨日と違い雲もなく外が明るい。チトはすでに、雪に埋まった建物の下へ行く準備を整えていた。ユーリもレーションを頬張りながら身支度をする。

「あれ、ヌコはどうしたの。ゆーと一緒に寝てたよね？」
「あいつ、たまーにどっか行くよね。」

　ヌコのことは気になったが、ユーリも準備が整ったので下の探索をすることになった。チトがランタンを付け先に階段を下り始める。階段の横には扉、おそらく人用の昇降機があったが、今は動いていないようなので階段を使う。

「ちーちゃん案外暗いとこは平気だよね。」
「でも先が見えないのは怖いな…　ってうおお！」
「ちーちゃん?!」

チトが急に体勢を崩したのでユーリがとっさにリュックをつかむ。

「って、ちーちゃんここ最後の段じゃん。」
「もう床についたのか…? 段があると思って足を出したら床でびっくりした…。」

どうやら建物の一番上の階の床まで降りれたようだ。目の前に暗闇が広がる。外見通り建物の内部はかなり広く、ランタンの明かりでは壁まで見通せない。

「とりあえず壁まで行きたいな…」
「ん? 今なんか音が…」
「えっ！」

驚いたチトが耳を澄ます。あたりが静寂に包まれる。

「なんだ、何も聞こえない…ってうわああ!」
「電気がついた!」
急に電気がついたのでチトは驚きのあまり倒れ、ユーリは小銃を構える。先ほど音が聞こえたほうから何か出てきた。ユーリはとっさに銃口をそちらに向ける。
『ヌイー』
ラジオから声がする。照準器越しに白いものが見えた。
「何だヌコか…お前がやったのか?これ」
「ってユーリ!これ…」
明りに照らされた建物の中には、数えきれないほどの棚が見えた。棚の一つ一つは二人の背丈よりも大きい。壮大な光景に二人は息を呑む。

「…すげえ。」
『スゲー』
「とりあえず、何かないか探そう。」

二人は二手に分かれて棚の森の探索に移った。

しばらくして二人が棚の森を抜けて、合流する。ユーリはどこからか見つけてきたカートを押していた。

「ちーちゃんの方は何かあった？」
「何か、よく分かんない瓶だけだった…。って随分持ってきたな、ガラクタばっか。」

カートには、よくわからない機械の部品など山積みにしてあった。山の上にはヌコが乗っている。ユーリはその中から一つ、機械を取り出してチトに見せる。機械は四角い

箱の先に板のようなものがついていて、板の淵には戦車の履帯のような鎖の和が巻き付き、そこに鋭い歯が並んでいた。

「見てこれカッコイイよ！」
『カッコイイ』
「なんか危なさそう…、捨ててこい。」
「やっぱ武器かな？」
「早く捨てろ。」
「ちぇ。」

結局、よくわからない瓶だけを持って下の階へ行く。瓶は知らない文字で書いてあったため、何が入っているか分からなかったが、どうやら粉のようだ。降りた先に玄関と思しきシャッターが閉まっていた。広いわりに高さは無いようだ。シャッターは頑丈そうで、立ちふさがるように無数の机が並んでいた。

「なんか机の上に機械が並んでるね。」
「電気はついたけど動いてないみたいだな。」

二人は機械を調べる。機械には小さいモニターとボタンが沢山ついていた。それのほかに引き出しがあったが、多くが閉まっているか空いていても空だった。

「何も入ってないな…。」

「ちーちゃん見て見て！なんだろ？」

ユーリは薄く小さな円盤状の金属を山のように持っていた。手からいくつかこぼれ、床に落る。甲高い金属音が広い建物でよく響いた。

「うーんどこかで見た気が…多分これは『お金』ってやつじゃないか？前、本で見た気がする。」

「なにそれ？」

「物がほしいときに交換するものらしい。」

「こんなの貰ってもうれしくない…」

『タマガイイ』

「なんにせよ、昔は価値があったらしい。よくわかんないけど。記念に一つ持っていく

か。」

チトは黄色に輝く穴の開いた硬貨を手に取る。

「綺麗だね、ちーちゃん。」

「やっぱ、これが一番価値がありそうだな。」

ポケットにそれを仕舞うと、二人は捜索へ戻る。

上に比べ下の階は棚は少なかったが奥に倉庫がある様だった。倉庫もかなり広く、歩き回りつかれた二人は先に休憩を取ることにした。チトがお湯を沸かしていると、瓶を眺めていたユーリが何かに気付いた。

「ちーちゃん、もしかしてこれってお湯に混ぜて飲むんじゃない？」

「なんでわかる?」
「この絵見てよ。」

瓶には、湯気が出るコップに瓶から粉を入れる絵がついていた。

「ゆー冴えてる。」
「早速やってみよう!」

二人は沸かせたお湯をスチールカップに移し、瓶を揺らして少しだけ白い粉を入れる。ナイフでかき混ぜると粉が溶け、湯が白濁した。お腹がすいたユーが先に飲む。

「…おいしい」
「なに味?」
「なんかこう…、あったまる味。特別おいしいわけではないけど、」

続いてチトも口を付ける。

「ほんとだ、味はあんましないけどおいしい。」
「これなんかに混ぜるやつだよ、絵のお湯も色ついてるし。」
「これでも十分だよ。お湯よりおなか一杯になった感じがする。」
「そうだね。」

その後、倉庫の奥でレーションや缶詰の箱を見つけたため機体に運ぶことにした。なぜか爆薬や弾丸もあったが予備は十分あったので置いてきた。レーションなどの箱は多く、すべては機内に入りきらなかった。仕方なく飲料水のタンクを翼下のロケット発射用レールに括り付け機内に空きを作った。幸い、飲料水のタンクは円筒形で抵抗も少なく、二つあったためバランスも悪くなく飛ぶのに支障はなさそうだ。二人でエンジンをかけ、機体は離陸した。

「食べ物も補給できたし上へ行くか。」
「いいんじゃない？あ、そうだヌコ。」

『ヌイ?』

ユーリがポケットから何か取り出した。重い金属音がする。

「２０いっぱい持ってきたぞ。」
『アリガテェ』
「またそんなもの持ってきて…」

チトはスロットルを上げ、操縦桿を引く。ソードフィッシュはゆっくりと、しかし着実に高度を上げていった。

続く

価値

「何にも見えないね、ちーちゃん。」
「弱ったなぁ。」

二人は霧の中にいた。新たな階層に難なく上がった後、当てもなく飛行していた。しかし、ユーリが近くに都市のようなものを見つけたというので、半信半疑ながらチトは、都市のあるという方角を目指した。だが行く手を濃霧が阻む。

「ほんとにこっちなんだろうな。」
「多分。ってちーちゃん前！・まえ！・」
『マエ！』
「おうぅ!?」

霧の中から何か現れた。かなり大きい。チトが慌てて操縦桿をいっぱいに引き、機体を半回転させ回避する。いきなりの高機動飛行にユーリが驚いて黙る。

「…あーびっくりした。失速して落ちたらどうするのさ、ちーちゃん。」
『オチルー』
「こいつはこれぐらいの機動じゃ落ちないよ。でも今のは危なかった。」

ソードフィッシュは速度が遅いのが引き換えに、操作性や機動性がかなりいい。これが幸いして回避はうまくいった。先ほど当たりかけたのは建物のようで、わきを抜け先へ進むと次第にあたりの霧も晴れてきた。いくつも建物が見える。どうやら都市についたようだ。

「ほんとにあったな。」
「信じてなかったの？ひどーい。」

広めの道路を見つけ、二人は着陸した。降りると建物の高さが際立つ。階層の半分ほどもある建物も多い。

「どうしよっかちーちゃん。補給施設はなさそうだよ？」

「とりあえず霧が出てた方へ行こう。」
「なんで?」

しばらく霧の方へ進む。近づくと霧の中から少し下に、広い道路のようなものが出てきた。だがそれはすでに道路ではなく川だった。元が道路だったためか浅い。川幅はかなり広く、わずかだが流れもある。

「霧の原因はこいつか。」
「大きい川だね。」
『カワー』
「浅くてちょうどいい。洗濯でもするか。」
「えーやだー。めんどー、」

結局、チトが洗ってユーリが飛行機まで持って行って干すことになった。薄着になった二人だが一応、靴と最小限の道具の入ったリュックを持つ。さすがに溺れることはないので一人で川に入った。手際よく洗い、ユーリがさっそく持っていく。

「寄り道すんじゃねえぞー」
「わかってるわかってる。」

だが、案の定しばらくしても帰ってこなかった。

「あいつ…しょうがない自分で持っていくか。」

一人で洗った洗濯物を持っていく。翼の張り線やロケット用レールなどに引っ掛けて干していると、ユーリが戻ってきた。

「なんかすごいものがあったよ!」
『アッター』
「どこ行ってたんだよ。まず手伝え。」
「えー、いいから…」
「あ〝?なんか言ったか?」
「いいえ、干します。」

さすがに懲りたユーリが干し始める。チトは川に戻り洗濯を再開した。

しばらくしてすべて干し終わり、ユーリが言っていた建物へ行く。かなり立派な建物で、門の前には例の石像が二人待ち構えていた。

「これも寺院なのかな？ヌコわかる？」

『シラナイ』

「何にせよ入って確かめよう。乾くまで暇だし。」

「やったー！」

重厚な石の階段を上がり、入り口から中に入る。そこは吹き抜けの大広間であったが、やはり荒れ果て何もない。武器以外は。

「やっぱみんなこんな感じだよなぁ。」

「この奥は何かあるかな？」
『イコー』
「おいゆー、危ないからあんま先に行くな。」
「なんかすごいのがあった!!」
「え？」

チトが慌てて奥の部屋へ行く。そこには金属の巨大な扉があった。ユーリが取っ手を引っ張るがびくともしない。

「あーかーなーいー！」
『アケレル』
「マジで！」
「マジか。」
『マジ』

ヌコは扉の近くの小さい穴に手を入れた。

『ヌヌヌヌヌヌヌヌ…』

　するとすぐに轟音とともにゆっくりと扉が動き出す。驚いた二人が少し離れて見守る。部屋の中が見えた。広い部屋の中に、何か山のように積んである。しかもたくさん。

「これなんだろ？」
「紙？　本…じゃないな。」
「でも文字が書いてあるよ。」
「この字どこかで見た気が…あ！」

　ポケットから例の硬貨を出すチト。

「ところどころこれと同じ字がある。」
「つまりこれって全部お金…？」
「すごい。」
「これってお金の倉庫だったのか。」

チトが感動している横でユーリが何かしだす。しばらくして煙が上がってきた。

「おいユーなにしてるんだ。」
「燃やそうかと。」
『クエナイモノニカチハネー』

山から少し取った束を集め、そこへ火打石で火をつけようとしていた。

「多分これだけたくさんあるってことは、この黄色いのの数百倍？いやもっと価値があるんだぞ。」
「どうせ交換するものもないし、価値なんてないよ。」
『クエナイモノニカチハネー』

以前どこかで会ったような展開だ。だが今回は持って行っても誰の役に立ちそうはない。

「まあ使えないしいいか…いっぱいあるし。」
「案外、怒らないんだね。」
「でも火事か酸欠になりそうだし燃やすのはやめろ。」
「ちぇ。」

燃え始めた焚火を踏んで消すユーリ。ほかの部屋にも扉があったので見て回った。しかし、ほかには黄色く輝く金属の棒のようなものが、紙幣と同じように山になって積んであっただけだった。暗くなったので、今夜はここで寝ることになった。

「もしかして、あの黄色いのレーションだったんじゃ?」
「絶対ないでしょ。」
『ナイゾ』
「お湯で溶かせば…」
「無理だろ」
『ムリダロ』
「あ、あとさっき思いついたんだけど、あのお金の山案外役に立つかも。」

ユーリが山を片っ端から崩し始める。近くの台車で山を押して寄せ集め、ひとつにまとめた。作業が終わったのか、ユーリが山へ潜る。

「何してんのさ。」
「ここで寝るとあったかいんじゃない？かまくらみたいだし。」
「ほんとか？」

続いてチトも潜り込む。確かに暖かい。

「おお…確かによさそうだな。」
『キモチイイ』
「案外これにも価値はあったね。」
「そうだな…」

よほど気持ちよかったのか、二人が眠りに落ちるまでに時間はかからなかった。

続く

音頭

『・・・――――・・・』
「ヌコ？なんか言った？」
『ヌイ？』

ラジオがから音がした、ヌコに聞いてみるがどうやら違うようだ。

「ゆー、ヌコがどうしかたー？」
「いやなんか音が…」
『・・・――――・・・』

音は周期的に、同じリズムを繰り返していた。

「これも、ヌコのでかいのが話してるのか？」
『チガウ』

「じゃあ、どっから聞こえてるか分かる？」
『ワカル』
「どっち？」
『アッチー』

ヌコの足が左翼の方を指さす。今の進行方向からすると寄り道になってしまう。

「どうする？行く？」
「まあ、もともと行先なんてないし行こうか。」
「珍しいね、ちーちゃん。」
「幸い、燃料も食べ物も補給したばかりだしな。」

ソードフィッシュはヌコの指さした方を目指し飛ぶ。ほどなくして巨大な鉄塔が現れた。

『・・・――――・・・』

近づくほどに音が大きくなる。

「あれから聞こえてるのかな。」
『ヌイ。』
「そうらしいねー」

塔の下の方には、同じ大きさの塔が何本も倒れていた。その周りには建物と滑走路のようなものもある。周囲は瓦礫で覆われていた。滑走路は長く、何本もあった。一番近くの長い滑走路を、ユーリが指さす。

「この真下にあるやつに降りようよ！」
「よく見ろゆー、穴だらけだぞ。」

一番近くの滑走路を、ユーリが指さす。滑走路は爆撃を受けたのか、はたまた砲撃を受けたのかクレーターのような大穴が無数に空いていた。大きい穴には水が溜まっている。仕方なくほかの滑走路を探す。

「あ、あれは行けるんじゃない？」
「あー…、いけるかな？」

滑走路の中で、唯一穴を瓦礫で埋めてある滑走路があった。とても平坦ではないが、この複葉機ならいけるかもしれない。チトが機体の高度を落とし、滑走路に近づく。まもなくタイヤが接地しそうだ。

「ゆー、つかまれよ。」
「うおおおおお。」
『ヌヌヌヌヌ』

穴を埋めた瓦礫を通るたび、機体が揺れる。しばらくして機体は無事止まった。降りた二人は付近の建物を調査することにした。

「まだ通信してるってことは人がいるのかな?」
「…さあ、でも銃は構えてろよ。」
『ヌイ?』

射撃の邪魔になりそうなので、チトがヌコを首に巻く。建物は2階建てで、石のような材質でできていた。屋根からは塔へケーブルがつながっている。最近まで使っていた施設なのか、窓もドアもまだある。とは言っても、チトたちが生まれる前だろうが。

「おじゃましまーす。」
「誰かいますかー。」

ドアをひとつずつ開けて確認するが、やはり誰もいない。あるのはほとんど空の棚や机ばかりだ。

「ちーちゃんこのドア見て。」
「なんか厚いな。」
『ホーソーシツ。』

「放送…？じゃあここからあの電波が出てるのか。」

厚い防音ドアを前に、人がいるのかもしれないと息をのむチト。

「じゃ、開けるね。」
「ちょっ、待てゆー！敵がいたｒ…」
「ゴメンもう開けた。」

チトの制止もむなしくドアが開く。部屋の中の様子が見えた。

「やっぱ誰もいないね。」
「そうだな。」
「機械があるよちーちゃん。」
「これが電波を発信してた機械か。」

本棚くらいの機械が壁に並ぶ。ほとんどは止まっているが、まだ動いてる機械からは小さな作動音と、点滅するランプが見える。ユーリがボタンを押していると、機械から

小さな箱が出てきた。

「何だこれ。」
「そこの棚にたくさんおいてあるな。多分それぞれから特定のリズムが出るんだろう。」
「他のも入れてみよう。」

片っ端からユーリが入れていく。だが、ラジオから聞こえてくるのはどれも同じようなリズムの繰り返しばかりだ。

「これなんだろ?音楽?」
「多分これは暗号かな、音の長さが文字になってるんだよ。」
「でも私たちにはわかんないね。」

ユーは別の棚を探し出す。倒れた棚から何か見つけた様だ。

「これって本じゃない?文字が書いてある。」
「いや、これは本じゃじゃないな薄いし。袋になってるのか?」

チトが紙の袋のようなものから黒い円盤を出す。

「なにこれ。」
「これはレコードってやつじゃないか。これに音楽が入ってる。前、本で見た。」
「音楽かー、でもこの穴には入んないよ。」
「んー、でもこれがあるって事はどうにかして聞いてたはずだ。どこかにこれを回す機械があるはず。」
「これじゃない？回らないけど。」

別の機械にちょうどレコードが入りそうな隙間がある。ユーリはそこを指さしていた。

「本で見たのと違うけど、入れてみるか。」

少し入れると、レコードが吸い込まれて行く。しばらく作動音がしたのち、ラジオから音楽が聞こえる。明るい音楽だ。しばらくして人の声も流れ出す。

『Ｄｏ　ｙｏｕ　ｒｅｍｅｍｂｅｒ　ｔｈｅ～♪　２１ｓｔ　ｎｉｇｈｔ　ｏｆ　Ｓｅｐｔｅｍｂｅｒ?～♪』

「やっぱ、なんて言ってるか分かんないね、ちーちゃん。」
「でも、」
「でも?」
「これはなんかこう…楽しくなる音楽だな。」

チトの表情が緩む。それを見たユーリが立ち上がり、チトの手を取る。

「じゃあ踊ろう!」
「っておい、ゆー?!」

ユーリが手をつなぎ踊りだすので、チトも続いてぎこちなく動く。しばらくしてリズムを覚えたユーリが歌いだす。

「らーららー。ららららら。らーらー。」

「お、おお。」

踊りについていくのが必至なチトをしり目に、ユーリは歌いながらノリノリで踊っている。でもチトも表情は楽しげだった。びうも派手な照明もないが、二人だけのディスコは夜遅くまで続いた。

続く

霧雲

「これはちょっとやばいね。」
「日が落ちてきたな…早く降りる場所を探さないと。」

二人は夕暮れの中、着陸できる場を探していた。しかし、下には廃墟と瓦礫が広がっているばかりで一向に道路などは現れなかった。日もかなり落ちてきており、いつ夕闇に包まれてもおかしくない。

「もーいっそビルの上に着陸しようよ。」
「絶対無理だろ…」

そんなことを言い合ってるうちに、日が完全に落ちたようで階層の隙間から漏れる光が途絶えた。地上にはいくつか明りがついているが、ビルの明かりなのか街灯の明かりかわからなかった。

「あーもういっそビルに着陸すればよかった…ゆー何か見えるか？」
「…ない」
「え？」
「もう食べられない…もがもが…」
「くそ、こいつ寝やがった。」

結局、周りに見えるものはないのでまっすぐ飛び続けた。建物の明かりも次第に少なくなりチトは引き返そうとする。ところが、しばらく行くと一本の明かりの筋が見えた。

「おいユーリ起きろ！あれ何か見るか？おい！」
「むにゃむにゃ…おはよーってもう朝？」
「あとで覚えとけよ…早く下見ろ。」
「あーい。」

チトは注意しつつ高度を落とし、ユーリがスコープで下を見る。どうやら光の筋は道路の街灯のようだった。道幅もソードフィッシュが降りるのに十分な幅はあった。

「しめた！」
「よかったねちーちゃん、私が見つけたおかげだね。」
「お前は黙ってろ。」

長い飛行で疲れていた二人は、すぐに寝支度をし道の上で夜を明かした。周囲で野営できる建物を探したかったが、ランタンで照らしても何も見えなかった。また疲労していたため捜索は明日にすることとした。

「うーん…ちーちゃん？」
「…」
『…』

強い明りに目を覚ましたユーリ。チトやヌコからの返事はない。目が明かりに慣れ

てくると、上には雲の合間に見える太陽があった。来た方向を見ると、階層の断面が見えた。最上層は霞んで見えない。横を向くとチトもヌコもまだ寝ていた。

「いつの間にか階層の上に出たんだね…、ちーちゃん。」

「うーん…」

「って、なかなかちーちゃん起きないな。」

昨日の長時間飛行のせいか、チトが起きる気配はない。暇なユーリが周囲を見て回る。やけに深い霧が視界を邪魔する。

「見えないなあ…。一人じゃ危ないけど端の方までなら大丈夫か。」

道の端の方に行くと手すりがあった。手すりに手をかけたその時、強風とともに霧が晴れた。

「うわ!」

「どーした…ゆー…?」

「こっち来てみて！ねー早く！」
「ちょっと待ってよ…」

ユーリがチトの手を取り引っ張る。手すりから身を乗りだし、下を指さすのでチトも見る。寝起きで重い瞼をどうにかしてあげる。

「うわあああああ！」
「これ橋だよ！飛び切りでかいやつ！」

手すりのはるか下には階層の廃墟らしきものが霧、ではなく雲間に見える。雲は雲海のように下に広がっていた。確かにここは橋の上のようだ。驚いたチトが転げながら橋の中央へ戻る。橋は階層の何層分もの高さがあった。

「高すぎる。」
「どしたのちーちゃん？飛行機の上だと平気なのに。」
「それとこれとは違う…にしても高いな、なんの橋だ？」
『ハシ？』

「ヌコも起きたか。」

橋の先を見るも雲がかかって見えない。朝食ののち、先まで探検することになった。

「でかい橋だねちーちゃん。横幅もかなりでかいし、そんな怖がらなくても落ちないよ。」
「それはわかってるけど、…あ。」

割と歩いてすぐに、雲の中から何か出てきた。

「これは、車？」
「車は車でもトラックだな。積み荷は乗ってないか…」

そういうと、チトは運転席の方へ行く。

「あ！」
「ちーちゃん!?」

橋が途切れていた。足を踏み外したチトは、落ちる寸での所で橋の鉄骨に手をかける。

「っく…。」
「ちーちゃん！手伸ばして！」

ユーリが手を伸ばす。

「ん？」

しかしすぐにユーリは何かに気付いた。頭の上のヌコもすぐ気づく。

「ちーちゃん！下見てしーたー！」

『シタ！』
「絶対に嫌だぁー！早く手ぇ―のばせぇー!!」
「だーかーら！下って！もう…」

ユーリは次の瞬間、ポケットから出したレーションの袋を下へ投げる。食べ物を投げるユーリに驚いたチトは、レーションにつられ下を向く。レーションはすぐに床について軽い着地音を出す。

「あ、床。」
「この高さは下りても大丈夫でしょ。」

すぐ下に床があった。この橋も階層都市ように2重構造になって要る様で、下の床はまだ残っていた。高さも飛び降りて大丈夫なようだ。チトが鉄骨から手を放すと、すぐに足がついた。

「死ぬかと思った…」
「良かったねちーちゃん。」

『ヌイー。』

　その後チトは上に上がり、二人はトラックを調べた。トラックの運転席側のタイヤが落ちていたため、止まっていたようだ。念のため腰ひもを付けて運転席に入るユーリ。

「なんかあったか―？」
「お、これは食べ物？」

　ダッシュボードから何か見つけた。レーションのような紙箱に何か丸い筒の銀袋が入っていた。

「これはどこかで見たな…えーと」
「こひだっけ？」
『コヒ？』
「そう、それそれ。食べ物のことはよく覚えてるな。でもどこで見たっけ？うーん。」
「そんなことより飲もうよ！ちーちゃん。」
「そうだな。」

『ソウダナ。』

湯を沸かし、コップに袋から出した黒い塊を入れる。

「おお…」

「いい香りだね、ちーちゃん。」

珈琲の深い香りが雲間にも広がった。

続く

再生

「ここも家ばっかだね。」
「うん。」
「前もこんなとこ来たよね。」
「うん。」

二人は家が建ち並ぶ区画を歩いていた。路地は狭く、飛行機は遠くの広い路地に止めてきた。小さい路地には家が立ち並んでいるものの、家のほとんどは建築途中のものであった。

「もう疲れたし帰ろうよ。」
「まだ全然歩いてないぞ。」
「うー。」
「こっちの路地は何があるのかな?」

家と家の間の路地を抜ける二人。そこのは他とは違う家があった。

「この家は完成してるのか？」
「屋根もあるよね。」
「入ってみるか。」

その家は他の建造途中の家とは違い、窓や屋根がしっかりと立て付けられていた。二人は家に入ることにした。念のためユーリは銃を手に持つ。チトがドアを開けた。

「やっぱ何もないな。」
「そうだよね。」

やはりこの家は無人であった。二人は家の中を調べ始める。どうやら昔は住んでいたらしいが、家財道具などはほとんど残っていなかった。

「この家ってさ、まえ見たのとは違うよね。」
「前のは壁がつながってたよね。」

この一帯の家は隣の部屋と壁がつながっていない家。つまり一戸建ての家ばかり建っている。二人は二階へ上がった。

「上もほとんど物がないね。」
「やっぱりかー。」

飽きたユーリは窓から外を眺める。外には同じような四角い家が遠くまで並んでいた。

「そういえば、ヌコはどこに行ったんだろう。」
「あいつ、よくいなくなるからな。」
「ところで、この辺の家ってさ、皆おんなじ形だね。」
「どこだってそんなもんだろ…って何だ、これ。」

チトは戸棚から何か見つける。箱には大きく『３００』と書いてあるとともに、何か絵が描いてある。中は何か入っているようだが、随分軽い。

「なんの絵だろ？」
「これは…山だな。」

箱を開けると、紙の破片のようなものがたくさん入っていた。

「なにこれ？ゴミ？」
「いやこれはパズルじゃないかな？」
「パズル？」
「この破片をそろえると絵が完成するらしい。」
「ふーん。」

食べ物以外興味ないユーリ。何もないと察すると早速帰ろうとする。

「ちーちゃん帰ろ…って何やってるのさ？」
「パズルを並べてる。」
「いや見たらわかるんだけどさ。」

「ちょっと待ってよゆー。」

チトはこういうことになると、てこでも動かないことを思い出したユーリ。あきらめて机に寝そべる。チトは外枠からパズルを攻めている。ユーリはそれを眺めていた。

「全然楽しくなーい。」

「面白いぞ?」

「箱かして?」

「いいけど、すぐに返せよ。これ無いとわからないから。」

手に取ってよく見る。箱には、いくらかの文字とともに青い山並みが描かれていた。

「さっき言ってたけど山って何?瓦礫でできたあれとは違うよね。」

窓から見える、建てかけの家の隣にあった瓦礫の山を指さすユーリ。この辺りには謎の石像とともに、多くのこういう山があった。

「この絵の山っていうのは、まだこういう都市がなかった頃の、土でできた地面の盛り上がりじゃないかな？」
「地面って青いの？」
「いやこれは山に木が生えてるんだろう。」
「森ってことか。」
「よく覚えてたな。そろそろ箱返して。」

箱をチトに返すユーリ。パズルはそろそろ外枠が埋まろうとしていた。

＊

「うーん。あれいつのまにか寝ちゃった…」

ユーリがお腹を空かして目を覚ます。外はすでに真っ暗だったが、室内の電気は生きているらしく、灯りが眩しい。

「ちーちゃんごはんにしよ…って寝てる。」

パズルを続けてやって疲れているのか、ぐっすりと寝ていた。

「おーい！ちーちゃん！…こりゃ起きないな。」

仕方なく、傍の机に寝かせた。床にあったパズルはほとんど完成しかけていた。ユーリは一人でレーションを頬張りつつ眺めている。

「おお、すごい。もう出来そうじゃん。」

すぐにレーションを食べ終えたユーリは、チトの分も食べようとする。しかし後々怖いのでそれはやめておくことにした。部屋は明るいものの、することがないユーリがパズルへ近づいた。

＊

「はっ?!わたしいつのまにか寝ちゃってたのか。」

外はすでに明るくなっていた。パズルの傍にユーリが寝ていた。

「まさかあいつ壊してないよな…？いや、最悪燃やして…」

そういいながらのぞき込むと、完成したパズルが見えた。

「あいつ…つまらないとか言ってたくせに。」

『ヌイ？』

肩から掛けていたラジオから音がした。ヌコは窓枠にいた。

「お前どこ行ってたんだよ？」

『タベモノヲサガシニイッタ』

「なんかあったか？」

『デンチガアッタ。』

「相変わらず色々食べれていいな。」

＊

昨日から何も食べていなかったので、チトはレーションを食べる。食べ物のにおいにつられてユーリが起きた。

「お、起きた。」
「おはよーちーちゃん…」
『オハヨー』

その後、朝食が終わってから飛行機へ帰る準備を始める。

「これもっていけないかな。」
「うーん。おいていくしかないかな、もったいないけど。カメラがあったらなあ。」
「そうだ！」

ユーリが何か持ってきた。

「昨日暇だったから部屋をあさっていたらこれが出てきました。」
「これは額縁か。」
「入りそうじゃない？」
「でかしたゆー。でも、」
「でも？」
「どうやって移すんだ？」
「あ。」

パズルは床に置いたままでこれを額縁に移すのは不可能だった。

「だったらこれで。」

ユーリは額縁の裏を外して上に乗せた。一応それらしくは見える。

「まあ、いいか。」
「じゃあね。」

二人は家を出て飛行機へ帰る。

「よくお前に完成できたな。」
「何その言い方。」
「楽しかった？」
「うーん。」

少し考えてユーリは答える。

「少しだけね。」

それを聞いたチトは微笑む。

続く。

投下（前編）

「爆弾を使おう。」
「いやダメだろ。」

燃料の補給施設のまえで、チトとユーリが立ち話をしていた。施設には大きなタンク、隣にポンプかなにかの大きな機械が錆びて並んでいた。

「燃料に引火するでしょ。」
「でもこれあかないよー?」

ユーリが錆びたバルブを回そうとするがびくともしないようだ。バルブの周りには貫通しなかった銃撃痕があった。

「あーもうだめ。おなか減った。」
「おいユー寝るな。」

ヌコも燃料を飲めないとあきらめたのか、飛行機に引き返していた。その飛行機の燃料も心もとないので、早急に補給したいところである。目の前に燃料があるのに補給できず、かゆいところに手が届かない思いをしているチト。

「あ、」
「ちーちゃんなんか思いついたの？」
「砲弾ならいけるかな？」
「あー、あれって弾だけなら爆発しないやつもあったね。」

今までの旅で爆薬や火器にお世話になった二人。ふとそのようなことを思い出した。

「でも…」
「この辺って武器落ちてないね。」

二人の周りの建物は荒んではいるものの、戦争があった痕跡はなかった。着陸した飛行機の後ろに続く道路も、穴一つ空いていない。

「探すか。」
「建物の中にしまってあったりするしね。」

二人は補給施設の先へ続く道を歩き始めた。

＊

「そういえばさ。」
「なに？」
「砲弾だけでいいの？見つけるのは。」
「いいよ。」

ユーリが歩きながら質問した。不思議そうな顔で別の質問に切り替える。

「ちーちゃんが投げるの？」
「無理だろ。」

「じゃあどうするの？」
「飛行機から落とすんだよ。」
「おぉ…」

ユーリが関心した顔でうなずく。

「その方が危なく…」
「ちーちゃんあれ倉庫じゃない？」

チトの説明を遮るように、ユーリが道路の先を指さす。開けた場所に起きな建物が見える。

「お前人の話を…」
「いいから行ってみよー！」

＊

「暗いな…」
「うぅ…ちーちゃん何か見える?」

建物の中に入った二人。照明はなく中の様子はわからなかったが、ランタンを持って壁沿いに進んでいた。

「うん?」
「ど、どうしたユー?」
「壁に何か柔らかいものが…」
「ええ!?」

驚いたチトがランタンを向けると、ユーリの手の先に何か白いものが見える。

『ヌイ?』

ヌコだった。スイッチの沢山ついた機械の上に載っていた。驚いていたチトが胸をなでおろす。

「なんだヌコか～」
「ちーちゃん怖がりだなぁ。ヌコ電気点けれる？」
『シャッターナラアケレル』
「ん？とりあえずやってみて。」
「おい、大丈夫なのか？」
『ヌヌヌヌヌヌ…』

ヌコが機械の中に入り鳴いている。音が聞こえるのはラジオからだが。しばらくすると四方の壁の下から明かりが漏れてきた。壁だと思っていたのは大きな窓であった。外を覆うシャッターが開くにつれて、外の光が差し込み中の様子が映し出される。

「おぉ…壁だと思ってたけどこれ窓だったのか。」
「ちーちゃんあれ！」

倉庫の中には戦車が並んでいた。ユーリは思わず戦車に向かって走り出す。

「すごいな。」
「これも倉庫なのかな？いや工場？」
「よく見ろユー。それぞれ形が違う。」
「どゆこと？」
「これは戦車の博物館じゃないかな。」
「はくぶつかん」
『ハクブツカン』

戦車の砲身にぶら下がって遊んでいたユーリのヌコが繰り返す。どうやら芋がわかってないようなので、戦車の周りを捜索していたチトが説明する。

「私もよくは知らないが、同じ種類のものを集めて飾ってる場所だよ。」
「だったら食べ物の博物館がよかったなー。」
『タベモノアルゾ』

戦車の上についていた、機関銃の大きな弾倉から顔を出すヌコ。

「お前はいいなー。」
「これは説明が書いてあるのかな?」

　戦車の前にはそれぞれ白い板に文字が書いてあった。読めない文字も混じっていたが大体読めるようだ。戦車の横のは砲弾もガラスケースに入れて飾ってあった。玉の下に小さな説明板があった。

「えーっと、てっこう弾、・・・・に穴をあける。・・に鉄で、できている。・・さく薬はない。…これだな。」

　手近に手ごろな物が落ちてないので、小銃の銃床でガラスを割ろうとユーリを探すと先の方で手を振っていた。

「あ、ちーちゃんこっち来て!この字なんて読むんだっけ?」
「お前に読める時なんかあったか?」
「失礼な…まあ読めないのが多いけど。」

ユーリが文字に興味を持つことに不思議がるチト。目的の砲弾も見つかったので、少し手伝ってやることにした。

「これこれ」
「えーっと、よん・・・せんしゃ。」
「違う違うこっち。」

別の文字を指さすユーリ。目で追っていたチトが読み上げる。

「ちと。…ん?」
「チト??ちーちゃん?」
『チト』

「え?」
「…」
「この戦車ちーちゃんって言うんだ…。そうだこの字日記に書いてあったね。」
「いや、き、きっとこれは何かの途中の文のはずだ…」

「いやあれ。」

ユーリが戦車を指さす。大きく威厳のある戦車だが、どこか精悍さを感じられた。

「ただの戦車だろ。」

「いや横、横。」

ユーリは指さしたのは戦車の砲塔の側面だった。そこには白い大きな文字で〝ちと〟と書いてあった。それを見ているとユーリが突然笑いだした。

「あはははっ…ち、ちとだってぇ…！ちーちゃんって戦車だったんだぁ。あはははっ…」

「…」

何が面白いのかわからないが、床に倒れて笑っているユーリ。チトは黙ってそれを見ている。

「うひひ…！　あ、ごめん、こっちも見ないでぇ…思い出しぅひゃひゃひゃ…」

「こ、このー！」

ついにしびれを切らせたチト。近くにあった戦車についていた巨大なレンチを頭の上に高く上げる。驚いたユーリが逃げ出す。

「くそぅ！こいつ！」

「ひぃ！あぶぅ危ないよちーちゃ…あっ！ははは思いしぃ…わはははは！」

しばらく建物の中からは、怒号と悲鳴交じりの笑い声が響いていた。

続く

投下（後編）

「ちぇ、なんで私が運ばなきゃいけないんだ…」
「あ〝？なんか言ったか。」
「なんでもないです。」

　チトの鋭い眼光にユーリがひるむ。博物館の中での追いかけっこは、ひと悶着あった後ユーリが砲弾を運ぶことで和解した。リュックに砲弾を詰めて歩くユーリが、先ほどの出来事をチトに思い出させないよう話題をそらす。

「にしてもさ、同じ砲弾がいっぱいあってよかったね。」
「まあ、そうだな。」

　同じような砲弾は戦車にたくさん積んであったので3～4個持って帰ることにした。

「そういえばさ、あの飛行機も爆弾とか落としてたのかな。」
「爆撃機ってやつか？どうだろうな。」
「おじいさんなら知ってたかな…」

チトが昔のことを思い返して歩いているうちに、愛機の元へ着いた。

＊

砲弾を落とす準備を始めた二人。最低限の荷物以外を下ろし、機体に砲弾を乗せるスペースを作る。砲弾も載せたのでいよいよエンジンを掛ける。エンジンにハンドルを刺し、エナーシャというはずみ車のスターターを回す。

「うぅ、重い。」
「おー、がんばれ。」
『ガンバレー』

ちなみに、どこからともなく戻ってきたヌコは地上待機となった。

「ちーちゃんがやってよ～」
「そしたら、ユーが操縦することになるじゃん。絶対やだ。」

しばらく回すと、エンジンの中から聞こえる回転音が高くなってきた。計器の回転数も十分なのでエンジンを始動させる。小刻みな爆発音とともにプロペラが回り始める。同時にエンジンの排気口から大量の煙が立ち上がる。ユーリはすかさず後部座席へ着く。

「なんかさ、」
「ん？」
「いつもやってることだけど、目的があるとなんか雰囲気違うね。」
「目的？ああ、なんだ砲弾を落とすことね。」
「あれ？」
「ちーちゃんは大げさだなぁ。」
「…」

いまいちユーリと共感できなかったチト、照れながらスロットルをを上げる。エンジンはさらに爆音を響かせながら機体が進み始める。

＊

しばらく迂回して、例のタンクの近くの上空まで来た。

「あれ、これって私が落とすの？」
「それしかないだろ。」
「ええー。」

いやいやながら、ユーリは重い砲弾を持ち上げる。

「そろそろタンクの上に来たかな？」
「ちょうどいい感じだよ。」
「とりあえずタンクに穴が開けばいいからその辺を狙って。」
「はーい。」

「あと分かってるだろうけど、真上で落としても当たらないから手前で投げろよ。」
「え?!」
「なんだ、知らなかったのか。じゃあ…」
「ゴメンもう落としちゃった。」
「えぇ…?!」

ユーリはタンクの真上で砲弾を落としたため、砲弾はタンクから大きく外れ落ちていった。

「何処に落ちた?」
「道に突き刺さったみたいだね。」

ユーリがのぞくスコープの先では道路に砂煙が俟っている。どうやらそこに落ちたようだ。

「ま、今のは私が言わなかったのが悪かったかもね。」

「次は絶対当てる。」
「ホントかぁ…？」
「コツはつかんだ。多分。」

＊

しばらくして、元の所へ機体が着陸した。次の投下でユーリが当たったというもの、信じていいものか不安げな表情を浮かべるチトと、自慢げなユーリが下りてくる。

『オカエリ』
「ただいま」
「ただいま～」

地上待機していたヌコが二人を出迎える。

「ホントに当たったのかなぁ。」
「ちーちゃん、信じてないなぁ…」

「どっちにしろ予備の砲弾はお前がとっとと捨てちゃったし、信じるしかないけど。」
「えへへ…。」

ユーリが笑ってごまかす。その行動力の速さをほかのことに使ってほしいと考えながらタンクのところまで行く。

＊

「開いてるねぇ。」
「割とでかい穴が開いたな。」

梯子を上ったタンクの上には、砲弾と同じくらいの穴が開いていた。中を覗くと、底の方にたまっている燃料と突き刺さった砲弾が見える。ユーリは自分の功績が認められて自慢げであった。

「底に穴が開かなくてよかったな。汲むのはバケツかなんかを紐でつるしてやるか。」

チトが燃料を汲んで確かめていると、ユーリがふらふらと歩きだした。

「…ってユーどこに行ってんだ。」
「なんか、甘いにおいがする…？」
「え？」

それを聞いチトも嗅覚に神経を集中させると、確かに甘いにおいがした。においの発生源と思われる方には小さい建物があった。

「あっちの方かな??」
「あっちは捨てた砲弾が落ちたあたりかも。」
「近づいてみよう。」

二人は建物へと向かう。

＊

「この建物みたいだな。」
「ああ～なんかとっても美味しそうなにおいが～」

ユーリが言った通り砲弾が落ちたのはこの建物のようだ。建物の屋根に大穴が開いている。重い扉は古びているが、カギは壊れていて開けることができた。入ると中にはタンクが並んでいた。

「これも燃料かな？」
「でもこれ甘いよ？」
「なんでわかる。」
「舐めた。」
「ええ?!」

ユーリが指をしゃぶっている近くには、砲弾によって傷が入ったタンクから染み出た赤い液体が見えた。

「お前、爆薬や機械油だって甘いのはあるんだぞ。大丈夫か。」

「おいしいよ…あとあれに似てる。」
「あれ？」
「びう。」

懐かしい名前を聞いたチト。確かに周囲に漂うにおいはびうのような鼻につくようなにおいがする。ユーリがタンクの梯子に上りだした。

「ちょっと、上から汲んでみるね。」
「気を付けろよ。」
「よいしょ…って、うん?!」
「うわ?!」

ユーリがタンクの上に乗った瞬間、タンクがひしゃげて大きくなった傷から大量の液体があふれ出した。慌ててユーリが飛び降りると、傷が元に戻りさらなる流出を防げた。しかしチトはすでにびしょぬれだった。ユーリが恐る恐る近づくが、チトに動きはない。

「ちーちゃん…大丈夫？」
「…」
「怒ってない？」
「…ふふふ」
「え？」
「ゆ～ぅ～!!」
「うわ!?」

いきなりチトがユーリに抱き着く。いきなりのことで混乱するユーリ。しかし前もこのようなことがあった気がする。

「ちーちゃんがまたおかしくなった…また月の魔力??いや月は出てないか…」
「ゆーの顔はよく伸びるなぁ～」
「赤いし太陽の魔力なのかなぁ…まあどうでもいいや。」
「もがもが」
「ちーちゃん髪の毛食べるのやめてよぉ…ヌコ助けてぇ…」

『ヌイ??』

そのころヌコは燃料タンクの上で二人が汲みかけていた燃料で、一杯やっていた。結局、二人は夜遅くまで飲み明かすこととなった。次の日、チトは自分の酔っていた時の所業と頭の痛さに苛まれるとは知らずに。

続く

隔壁

「もう少しで抜けられそうだね。」
「まったく…階層の端まで来ることになるとはな。」

チトとユーリの二人の乗る古めかしい複葉機、ソードフィッシュは今までより一層さびれた風景の中を飛んでいた。下の視界に見えるものは、ところどころ廃墟がある以外は、ただただ広がる無機質な床だけだった。その風景の中で一つだけ異様なものがあった。

「相変わらずっと続くな。」
「穴ぐらい開いてたらいいんだけどねぇ…」

それは巨大な壁だった。穴一つない壁が階層の上から下まで覆いつくしていた。もちろんその壁はすぐ途切れるようなものではなく。おおよそ階層全体を区切るような

巨大なものだった。

「やっぱもうこの階層は無視して上に行った方がいいのかなぁ。」
「なんで？」
「だって何があるか分からないし…」
「いや、何かしらあると思うよ。」
「え？」

急にユーリが確信を持ったような口調で言うのでチトは驚いた。すかさず聞き返す。

「いや…だからなんでわかるの？」
「昨日ヌコが言ってた。なんか電波か何か出てるんだって。」
「まじか。」

普段なら『なんで大事なことを言わないのか』とでもいうところだが、今回は壁の向こうに何かがあるという期待のほうが上回った。

「ヌコは今どうしてるの？」
「寝てるね。」
「色々聞きたかったけど、あとでいいや。」

またしばらくして、壁の端が見えるところまで来た。外までもうさほどない。

「ちーちゃんもう外に出れそうだね。」
「外に出るのも久しぶりだな。」
「燃料は大丈夫？」
「少し心もとないけど、壁の先まで行けるぐらいはあると思う。」
「じゃあ行きますか。」

＊

二人の乗る機体は階層の外へ出た。外は雨が降っていた。

「うわっ、雨か。」

「最悪だな…」
「それより寒い。ひぇ～」
「早く降りてお湯でも飲もう…」

階層の外に出て離れてみると、壁の側面があらわになった。厚さ的に高さとほぼ同じくらいある厚いものだった。視界が悪く、壁の向こう側の様子はまだわからないが空間は広がっているようで行けそうであった。

「これは結構手間だな。でも壁があまり厚くなくて…」
「あれ？」
「どうした？」
「雨がやんだ？」

急に雨が嘘のようにやんだ。事態は好転したが不気味がる二人。

「よかった…？」
「うん…」

「それより壁の向k…うわ！」
「うお！」
『ヌイ？』

機体に衝撃が走る。何かにぶつかったような音もした。ついでにヌコも起きた。

「なんだ!?」
「まさか攻撃!?」

ここ最近他人にあってないので緊張が走る。もちろん攻撃してくるのは人だけではないが。ユーリは後部の機関銃を立ち上げる。その間も警戒をしていたチトが何か見つける。

「ちーちゃん翼見て！」
「あ、穴だ。」

複葉機なので翼は二つあるが、上翼、下翼ともに大穴が開いていた。しかし下翼はど

うもおかしい。

「なんか下の方光ってない？」
「何か引っかかってるのか…？あれは…氷か。」
「ん？」

氷、空、降る。これらに当てはまるものがあったはずだ。チトは今までの知識を総動員して考える。

「そうだ！雹だ！」
「なに？ひょう？なに？」
「急いで階層に入るぞ！」

しかし、事態は悪化する。再び雹が降り始める。それも大量に。平均的な大きさは先ほどよりも小さいが、当たる度に機体は激しい衝撃に包まれる。

「ひぃ～！」

「もうすぐ階層だ！頑張れ！」
「何を?!」

なんとか氷の銃撃をかいくぐりソードフィッシュは階層内に避難することができた。外ではいまだ雹が激しい音を立てていた。機体にはさらに穴が開いていたが、飛行には問題なかった。

「危なかった…」
「氷がめっちゃたまってる。」
「なんか機体が重いと思ったらそれか。ゆー出しといて。」
「え～。」

ユーリがブツブツ言いながら氷を一個づつ投げる。その間にチトは計器を確認する。幸い、機械関係に故障は出てないようであった。

「燃料も漏れてないな。」

チトは機の後方に燃料が広がっていないか見渡す。その時この階層の状態を初めて確認した。

「ユーリ見て！水！」

目下はすべて水面であった。しかも水底もわからないほど深い。

「これは…うに？」
「うみ、でしょ。」
「そうそう」
「でも階層に海はないよ。」
「じゃあなんだろ、水たまり？」
「うーん…」

大きな水たまりにはところどころ建物の残骸が頭を出しているだけで、ほとんどが水面であった。どうやら先ほどの壁は、この水をせき止めていたようであった。階層の端にも壁があり、水を蓄えていた。なかなか階層に入れなかったのもこの水面の高低差の

せいであろう。

「壁壊さなくてよかったね。」
「さっきいった電波ももう水底かなぁ」
『ウイテル。』
「まじか。」
「何処にあるの？」
『アレ。』

ヌコが足で指す方には、建物に混じって何か横長い影があった。

「でかいな。」
「ともかく行ってみようよ。」

＊

「なんだこれは…」

「浮いてるから船じゃない？」
「船かあ。飛行場みたいだ。」

近づいてみると確かにそれは浮いていた。船の上は水平の何もない床で、端の方に構造物と塔が立っていた。

「ともかく降りれそうだし降りよう。」
「結構短いけど大丈夫かな？」

ユーリの不安とは裏腹に、ソードフィッシュは船の中ほどで止まることができた。

「さて…まずは穴をふさがなきゃな。」
「その前にこの服を何とかしようよー。」

息つく間もなくこの船まで来たので、その前に雨に打たれていたことをすっかり忘れていた。太陽も階層の間から見えるほど傾いていた。

「うーん、とりあえず今日は服を乾かせて終わりにするか」
「私あの建物で食べ物探してくるね。」
「追い逃げるな…てっもう行っちゃったよ。くそぅ。」

ユーリが脱ぎ捨てた服と一緒に着ていた軍服を干していると、ユーリが戻ってきた。手に何か持っているようだ。

「見てこれ！缶詰みたいなのがいっぱいあったよ！」
「ちょっと貸して。」
「なんて書いてあるの？」
「これは…こひ。」
「あーあれか。…そういえば。」

ユーリは飛行機に何かを取りに行って戻ってきた。

「これってそれに入れるやつでしょ！」

ユーリが持ってきたのは前に拾った粉だった。

「この絵についてる黒い飲み物はこひだったのか。なるほど、早速溶かしてみよう。」

とりあえず缶からこひを出して鍋にかける。開け方がわからなっかたので缶切りで開けた。温まったところでマグカップに移す。

「どれ。やっぱ水は入れなくてよかったな」

「じゃあ早速入れてみよう!」

粉の入った瓶からナイフで掬い取ってカップに入れて、そのままナイフでかき混ぜる。こひの中の粉は次第に広がっていき、言い具合の焦げ茶色になった。期待を込めてカップに口を付ける二人。

「はぁ〜」

「はぁ〜」

期待以上の味に、心の芯から溶けそうになる二人。水面の端では夕日が二人を温かく照らしていた。

「取り合えず、これからは修理と船の探索かなぁ。」
「そういうのは明日考えようよ。もう眠い…」
「そうだな、今日はいろいろありすぎた。」

夕日は沈み、一日が終わろうとしていた。

終。されど二人の旅行は終わらない、

番外編
解説

「ひどい霧だねえ」
「何にも見えないね、ちーちゃん。」

二人はいつの間にか、霧の中を飛んでいた。

「あれ、飛行場じゃない？」
「なんか変な色だけど降りてみるか。」

見つけた飛行場の地表は今までの地面と違い青くなめらかなものであった。前輪が地表につくも、激しい揺れは感じられない。機体が止まるとすぐにチトが下りた。

「これは、草原か？」
「草原ってなに？」

「植物が一面に生えた地面のことだよ。」
「よし食べてみよう！」
「おいユーやめｔ」

その時、霧の奥から人影が現れた。チトが慌てて機体に銃を取りに戻ろうとするも、ほどなく姿が見えた。

「その草は食べられないことはないが、あまりおいしくないよ。」
「だ、誰だ！」
「イシイだよ。」

チトは不思議そうな顔でイシイを見る。

「前にあったことがあるのか？」
「覚えてないのちーちゃん。」
「そういえばどこかで…うーん…」
「まずはこちらに来てくれ」

二人はイシイについていく。

イ「覚えてないのも無理ないさ。この世界線だと飛行機を作ろうとする私は出しにくいからね。」
ユ「そういえば左に出てきたこれは何なの？」
イ「これは3人だと誰が話してるか分かりにくいから付けておいたよ。」
チ「メタいな…」
ユ「でも、字の形が似ていてわかりにくいね。」
イ「後、私もあの飛行機に乗せてくれないか？」

そんなことを言っていると、草原の真ん中に黒板と教卓、そして椅子と机二つが置いてあった。

イ「そこに座ってくれ。」
チ「で、何をするの？」
チ「嫌な予感がする。」

イ「今回は君たちが乗っている機体の説明をする。」
ユ「ほらー、そんな気がした。」
チ「うるさいぞ、ゆー。」

イシイが黒板へ何か書き始める。『Ｆａｉｒｅｙ　Ｓｗｏｒｄｆｉｓｈ』と書いているようだ。ユーリはもう寝てしまった。

イ「君達の乗っている機体はソードフィッシュなのだが…何から話そうか。」
チ「名前のソードフィッシュってどういう意味ですか。」
イ「ソードフィッシュは英語で魚のメカジキという意味だ。」
ユ「魚?!」

食べ物に反応したユーリが起きる。

チ「起きたのか、食べ物反応だけは早いな。」
ユ「もしかしてこの飛行機食べれたり…」
イ「しないよ。」

チ「無理だろ。」

残念そうにユーリがまた寝始める。

イ「さて、こうだらだらと喋っているのもいいが、読者にも分かりずらいと思うので序章、３つの特徴、まとめを柱に手短に語っていくぞ。」

○序章

ユ「なんかまた眠くなりそうな題名だな…」

チ「どんな題名でも寝るだろ。」

イ「まあ序章といっても機体の簡単な説明をするだけだ。」

イ「まずこの機体は１９３５年、英国海軍が採用した艦載雷撃機だ。艦載機とは空母から離発着する飛行機、雷撃機とは魚雷で戦艦などを沈めるための飛行機のことだ。スペックは以下の通りだ。」

○諸元

・乗員：　３名

・全長：　１１．２２　ｍ
・全高：　３．８　ｍ
・翼幅：　１３．９　ｍ
・空虚重量：　２，１３０　ｋｇ
・動力：　空冷星型９気筒レシプロエンジン、５６０　ｋＷ（７５０　ｈｐ）×１
・最大速度：　２２２　ｋｍ／ｈ
・航続距離：　８８０　ｋｍ
・固定武装：７，７　ｍｍ　機関銃　２門
・搭載量：　６８０　ｋｇ

ユ「なんか難しいし、空母とか魚雷とか私たち知らないんじゃない??」
チ「海ないからな。」
イ「いちいちそういうの解説してると日が暮れるから、その辺の矛盾は適当に理解してくれ。」
チ「わかった。」
ユ「えぇ…」

イ「この機体は当時としても古臭い設計であったが、スペック表には出ない長所によって終戦まで使われ活躍していった。なぜこの機体が活躍したのか、前述のとおり３つの特徴を柱に説明していこう。」

○特徴１、『遅さ』

ユ「なんか特徴というより弱点じゃないの？」

チ「確かに。」

イ「この機体は当時としてもかなり遅い飛行機だ。同時期に日本が採用していた九六式艦上攻撃機と簡単に比較しても、最高速など劣っていることがわかるだろう」

ユ「ダメじゃん。」

イシイがまた黒板に何か書き始める。性能表らしい。

○ソードフィッシュ

最大速度：２２２ｋｍ／ｈ、航続距離：　８８０　ｋｍ、武器：７．７ｍｍ機銃×２、魚雷、爆弾１１３～２２７kg×２

○九六式艦上攻撃機
最大速度：２７７ｋｍ／ｈ、航続時間：１，５７４ｋｍ、武器：７．７ｍｍ機銃×２、魚雷、爆弾５００～８００ｋｇ

イ「さらに魚雷などを積むと１６０㎞／ｈぐらいまで落ちたらしい。」
ユ「ダメダメじゃん。」
イ「しかし、この遅さが当時の戦闘機の失速速度、つまり墜落する速度より遅いことで敵機からの撃墜を困難にしたそうだ。」
チ「おお。」
ユ「すごいようなそうでもないような…」
イ「さらに、戦艦ビスマルク追撃戦ではソードフィッシュの速度が遅すぎて、ビスマルクの対空砲の設定ができなかった為に対空砲が当たらなかったという逸話もある。眉唾だが測距していた上官が速度を報告したが、あまりの遅さに部下が信じてくれなかったという話もある。筆者的にはこちらの説を推したいね。」
ユ「なんか別の人の意見が混じってる気がする…」
チ「茶番だし仕方ないだろ。」
イ「後、低速さはＭＡＣ船という商船改造型の小型空母から発艦できるという点でも

商船護衛などでも役立ったらしいが、この話はまた後で説明しよう。」

○特徴2、『頑丈さ』

ユ「やっと長所っぽい特徴が来たね。」

イ「そうとも限らないぞ。」

チ「なんで？」

イ「〝古臭い機体〟という言い回しは機体構造にもかかっているんだ。この機体は帆布張りという構造で、名前の通り金属の管に布を張った機体構造でできている。この構造のおかげで、多少穴が開いてもエンジンや乗員に当たらなければ、飛び続けることができたらしい。先ほどのビスマルク追撃戦でも１７５箇所も被弾しながら無事に帰還した機体もあったらしい。」

ユ「（＊？･･･？）ふ～ん」

チ「あと修理もしやすいよね」

イ「チト君の言う通り、穴が開いて直すときも縫い合わせるか接着剤で貼るだけだから簡単だ。しかも修理用の材料も布だから船の中でかさばらない。」

ユ「すごいね」

チ「いやなんでお前が知らないんだ。ってお前はさぼってたからなぁ…（Φ＿Φ#）」
ユ「…」
イ「あと燃えてもはたけば消えるという話もあるが、眉唾物感があるね。そのほかにもエンジンの整備性の話なんかもあるけど長くなってきたから飛ばして次に行くぞ。」

○徴3、『簡単さ』

チ「簡単って何がですか？」
イ「飛ばす事だ。」
チ「それだけ？」
イ「それだけ。」
ユ「そんなの戦うのと関係ないじゃん…長くなってきて執筆めんどくさくなっただけじゃないの？」
イ「そんなことはない。飛ばすのが簡単ということはパイロットの育成が簡単だということだ。実際当時の練習機よりも簡単だったらしい。」
チ「まあパイロットがいないと飛ばないしね。」
イ「しかも先ほど出た船団護衛でもこの点は役に立った。船団護衛では主にUボート

というドイツの潜水艦を撃退することを目的とした対潜任務に就いていた。船団護衛では長時間飛び続け無くてはいけないが、操縦の簡易さはその負担を軽減したともいわれたらしい。」

ユ「ちーちゃんも毎日操縦してるからね。」

チ「そうだぞもっと敬え」

ユ「簡単だしいいでしょ。」

チ「あ〝？（Φ＿Φ＃）」

イ「あと時化の多い大西洋では離着艦が簡単な本機以外出せないような場面も多かったらしい。だいたいのことは話したし、まとめるぞ。」

○まとめ

イ「最後に、戦中この機体は〝買い物かご（ストリングバック）〟と呼ばれていたことを話そう。由来は帆布張りという頑強な構造と操縦の簡易さや速度の遅さ、それによって雷撃や対潜などの様々な任務を果たしていったという、いわばこの機体のスペック表には出ない長所を詰め込んだような愛称だな。」

チ「名は体を表すともいうね。」

イ「その通りだ。この機体は後続機がポンコツ機ばかっりだったたためにその時も〝買い物かごを返せ〟という替え歌でパイロットたちは抗議したらしい。これで解説は終わりだ。」

チ「おいユー聞いてたか？」

ユ「きいてたよ？」

チ「説明してみろ。」

寝ぼけ眼なユーリがふと答えた。

ユ「この飛行機ちーちゃんみたいなあほでも飛ばせる。」

チ「このやろー（、д、）」

ユ「ゲぇ!!」

チトの怒号で目が覚めたユーリ。そのまま草原での追いかけっこが始まった。

イ「せっかく一緒に飛ばして貰おうとしたんだけどな…もう時間か。」

終